

オペラは友達

鈴木敬治

No14 「ドンカルロ」

公演のご案内

まずは12月2日に開催が迫ったヴェルディ作曲オペラ「ドンカルロ」についてのお知らせです。
添付のチラシを参照いただき、ぜひご来場ください。

ヴェルディ作曲 オペラ「ドンカルロ」全曲演奏 イタリア語 4幕版

指揮:青木素子 ピアノ伴奏:土屋麻美 制作・演出:鈴木敬治

開催日 : 2023年12月2日(土)

会場 : 港区立 高輪区民ホール

時間 : 開場 16時30分 開演 17時 終演予定 20時30分

入場料 : 2000円

チケット購入希望の方は鈴木へのメアド goo500320@gmail.com までご用命ください。

私は中心人物 スペイン国王フィリッポ2世役で登場致します。

入場料が格安なのは港区から会場費用の格安提供をいただき、上限が2000円に設定されたためです。
皆様のご来場を切に希望いたします、よろしくご支援願います。

ドンカルロの5幕版の一幕のあらすじ

次にオペラ「ドンカルロ」の内容のご紹介です。

もともとヴェルディはフランス版 5幕物として作曲しましたが、パリで初演されたものを、イタリア語版にするときにあまりに長いので4幕物として再編成するのに、ほぼ1幕をカットしたので多少筋がわかりにくくなっています。
今回の4幕版にはない、当初の5幕物の一幕の概要は次の内容です。

許婚であるエリザベッタに恋心がついたドンカルロは、フランスのスペイン大使であるレルマ伯爵の一行に紛れて、フランスフォンテーヌブローの森でエリザベッタを待ち構えていた。レルマ伯の一行をかたってエリザベッタの前に現れたドンカルロは、話すうちにやがて写し絵の入った宝石箱を渡しドンカルロ本人であることを明かす。愛を直接打ち明けたドンカルロとエリザベッタは、急速に恋愛感情を高ぶらせる。そこにスペインとフランスの講和を告げる大砲の音が響き渡り、エリザベッタの小姓テバルトが、講和の結果、エリザベッタが一転、フィリッポ2世の妃となることとなったと告げる。

突如2人の間に運命の楔が打ち込まれ、二人には悲しみと別れが訪れる。

ドンカルロ4幕物イタリア語版(今回の公演のもの)あらすじ

第1幕

スペインのサン・ジュスト修道院、父に恋人を奪われたカルロは絶望の淵に落ちる。そこに親友のロドリゴ伯爵が現れ、突然義理の母となったエリザベッタへの愛に苦しむカルロに、愛を忘れて、厳しい政治状況に苦しむフランドルの人々を救うため、彼の地に赴くように諭す。二人は「ともに生き、ともに死ぬ」と友情を誓う。

修道院の前庭、王妃エリザベッタの女官中でも絶世の美女と言われるエボリ公女が小姓テバルトのマンダリン伴奏で「ヴェールの歌」を歌うその後、王妃が現れ、あいさつに来たロドリゴはパリの王母(カトリーヌ・ド・メデイス)からの書簡を手渡すが、その書簡の下にカルロの秘密の手紙を忍ばせる。その中身は「ロドリゴを信頼してください」と書いてあった。エリザベッタもカルロへのかつての思いに苦しむのをこっそり聞いていたエボリは、カルロが自分への愛に苦しんでいると勘違いする。エボリが立ち去った後、カルロが現れ自分がフランドルに赴けるよう、王に取り計らってほしいとエリザベッタに願い出るが、次第に秘めた思いを隠し切れずにエリザベッタを抱いてしまうが、厳しくエリザベッタに咎められ、絶望して走り去る。

その後現れた**国王フィリップ2世**はロドリゴに最近姿を見ないが、なぜかと訪ねる。ロドリゴはフランドルの惨状を訴える。フィリップは、ロドリゴに宗教裁判長の監視下にあることを警告する、そしてロドリゴとエリザベッタの見張り役を命ずる。

第2幕

王妃の庭園、夜半に会いたいとの匿名の手紙を受け取ったカルロは、エリザベッタからのものと思い込み現れる。しかし現れたのはヴェールで顔を隠したエボリだった、エリザベッタと思い込んで熱い思いを告白するが、エボリであることがわかり、カルロに恋していたエボリはその秘密を知り激しい嫉妬にかられ、ロドリゴを振り切って王に訴えると言って立ち去る。ロドリゴはカルロの持つ秘密文書を自分に預けるように言う。

アトーチヤ聖母教会前の火刑を行う広場、群衆が火刑を見物にたくさん集まっている。

そこに王始め王妃、重臣たちが集まる、伝令の御触れにつれて群衆は王万歳を叫ぶ。

そこにカルロが先導してフランドルの使節団が登場、窮状を訴える、そしてカルロは自らをフラバントとフランドルの王にしてくれと王に懇願するが一笑に付される

それに怒ってカルロは王に対して剣を抜く。側近に王はカルロの剣を取り上げろというが誰も取り合わない、そこにロドリゴが割って入って剣を取り上げ王に渡す。その功績を讃えて王はロドリゴをその場で公爵に任ずる

第3幕

フィリップの書斎、王妃の愛を感じられず、カルロにも裏切られたフィリップはわが身の老いを嘆いていると、宗教裁判長が現れる。フィリップがカルロの処置を尋ねると、カルロは死刑に処すべきと答え、本当の異端者はロドリーゴであると、彼の死刑も求める。フィリップは「忠実な部下の命を奪うことはできない」というと宗教裁判長は激怒し不気味に去っていく。エボリは嫉妬のあまりエリザベッタの宝石箱をぬすんだこととフィリップと不倫関係にあったことを告白。エリザベッタはエボリに国を出るか修道院に入るかを迫る。エボリは自分の美貌が招いた結果だと「呪わしき美貌」を歌い修道院に入る決意をし、その前にカルロを救うことを誓う。

第4幕

牢獄の中、カルロが捕らえられている。ロドリーゴがやってきて「わが最後の日」を歌う。フランドル救済をカルロに託して、自分が悪者になる形で死を決意する。その時宗教裁判長の刺客の銃弾にロドリーゴが倒れる。瀕死の彼はエリザベッタが明日サン・ジュスト修道院で待っていると告げ、息を引き取る。

夜のサン・ジュスト修道院、エリザベッタは「過ぎた日のたのしきやカルロへの思い」を歌う。現れたカルロにかれの情熱をフランドル救済に向けるように願い、別れを惜しむ。そこにフィリップが宗教裁判長とともに現れカルロを捕えようとするが、カルロはカルロ5世の墓のほうに後ずさりしながらついに自分の運命を自ら決することとなる。

ドンカルロの見どころ

ヴェルディ作曲のオペラ「ドンカルロ」の見どころ・聴きどころについてもう少し述べたいと思います。このオペラはヴェルディのオペラの中でも特筆すべき作品です。

1) 低音部が素晴らしい

ヴェルディのオペラには低音部すなわち女性ならメゾソプラノ、男性ならバリトン、バスに主人公や重要人物を多く当てはめています。特にドンカルロにはドンカルロの父のフィリップ二世(バス)、ドンカルロの親友にしてフィリップ2世の忠臣 ロドリーゴ(バリトン) 修道士(バス) フランドルの使者(バリトン) 絶世の美女エボリ公女(メゾソプラノ)もすべて低音声部が占めています。

2) 特筆すべき音楽の存在

稀有なテノール(ドンカルロ)とバリトン(ロドリーゴ)の2重唱は男声の2重唱ではもっとも有名なものと言われて、「友情の2重唱」と称されます

バス(フィリップ2世)のアリアはチェロの伴奏がすばらしく、世界中のバス歌手が必ず歌いたいと手を挙げる有名なアリアです。また稀有のバス(宗教裁判長)とバス(フィリップ2世)の2重唱が上記アリアに引き続き奏でられます。

エボリ公女には「ヴェールの歌」や3幕のアリアなど美しい曲が与えられて、特に2幕のロドリーゴ、ドンカルロとの3重唱は超絶技巧が駆使される難曲です

3) 史実との整合があり歴史の世界が目の前に広がる

オペラの設定が1568年のドンカルロ死亡年に設定されており、主な登場人物はタイトルロールでもあるドンカルロはじめフィリッポ2世、王妃エリザベッタ、エボリ公女が実在の人物であります。

同年代の日本は織田信長の時代、欧州からもたらされた鉄砲を国産化に成功して信長は当時の世界一の鉄砲保有国となり、スペインはイエズス会の修道士を手先として東南アジアの植民地化を虎視眈々と狙っていたのです。当時の地球の東西でスペインと日本は互いに大きな存在感を見せていたのです。

4) 対立軸の多さ

- ・カトリックのフィリッポ2世、宗教裁判長対新教のロドリーゴ、ドンカルロ
- ・エリザベッタの愛をめぐるフィリッポ2世対ドンカルロ
- ・スペイン宮廷
(エボリ公女、女官たち)対フランス宮廷(エリザベッタ、アレンベルク公爵夫人、レルマ伯爵、テバルト)
- ・ロドリーゴのフィリッポ2世への忠誠とドンカルロへの友情
などなど

こうご期待